

## 音楽専攻ではない学生の絶対音感, 相対音感保持についての一考察 —絶対音感・相対音感チェックテスト実施と結果の分析—

### A Study on the Retention of Perfect and Relative Pitch in Non-Music Major Students —Administering Tests to Check Retention of Absolute and Relative Pitch and Analyzing the Results—

川内 奈保子\*  
KAWAUCHI Naoko

#### 要 旨

本研究は音感保持についてトレーニングを受ける機会がないであろう一般学生の絶対音感, 相対音感保持について, どの程度, それぞれの感覚を持ち合わせているのかを調査し, 音楽専攻ではない学生がどれくらいの割合で潜在的に絶対音感, 相対音感を保持しているのかを確かめ, 今後の講義における学生へのアプローチを再考する一つの手段を見出すことを目的とする。絶対音感, 相対音感についてのチェックテストを複数学部の学生に対して実施し, その結果を分析, 考察した。

#### Abstract

The purpose of this study is to investigate the degree to which students in general, who may not have had the opportunity to receive training in the retention of pitch, have a sense of absolute and relative pitch, and to ascertain the percentage of non-music majors who potentially have a sense of absolute and relative pitch. The purpose of this study is to determine the percentage of non-music majors who have absolute and relative pitch, and to find a way to reconsider the approach to students in future lectures. A check test for absolute and relative pitch was administered to students in several departments, and the results were analyzed and discussed.

キーワード：絶対音感, 相対音感, 音楽専攻ではない学生

Keywords : absolute pitch, relative pitch, non-music majors

#### I. はじめに

2019年7月17日に発売された日本の人気女性アイドルグループ, 日向坂46の「ドレミソラシド」という楽曲(秋元康 作詞, 野村陽一郎 作曲)は, 歌詞の中に多数出てくる音階名と実際の音高の順番や高さが合致せず, 聴く人によって違和感, 気持ち悪さを感じると, その曲を聴いた人の中で大きな話題となった。Twitter等のSNS上でもそのような「違和感」を感じるような声が上がリ, 音楽に携わる人からは「気持ち悪い」と音楽としてそのような歌詞を採用することに疑問を持つ声さえあった。以下にTwitterにおいて「日向坂46, ドレミソラシド, 違和感」の3つの言葉で検索した結果の中から数例を示す。

岡田ゆうへい@koltuko5 “日向坂の新曲「ドレミソラシド」出てる音と歌詞の音名が違うから違和感に感じる人も多いのかな”2019年6月8日(1)

KAZUN@KAZUNnK. “音感持ってる方なら分かって下さるであろう日向坂46のドレミソラシドの違和

感”2020年5月10日(2)

かなと@kanato4aflat. “日向坂のドレミソラシドが本当に耳に違和感で聴いてるとぞわぞわして気持ち悪い…って思ってたんだけど, 結構同じこと感じてる人いるんだね…この詞にこの音程当てたのなんで感2019年8月11日(3)

和田 佳丈/作編曲家@Wada\_Yoshitake. “最近だと日向坂のドレミソラシド(ミ♭ファソ問題)とか強烈に違和感を感じる曲が出ると知り合いの作曲家達が荒れるんだけど, そうやって音楽人が騒ぐことがそもそもマーケティングなんじゃないかとすら思う。2020年11月25日(4)

違和感を持つ人=音感を少なからず持っている人は一般的にどれほどいるのだろうか。

筆者は幼少期から音楽に深く携っており, 絶対音感や相対音感が無意識のうちに身に付く状況にあった。音に特に敏感な同業者, 音楽家の同僚も多く, 音を認識することを日常生活のすべての場面で無意識に行うことが普

通になっている人々と関わることが多かった。そこで主に音楽を専攻としない学生（教育学部、理工学部、政治経済学部）に講義において、専門的な音楽の教育を受けない学生はどのくらいの割合で絶対音感や相対音感を持つのかについて調査し分析することと具体的には音感保持についてミニテストを実施し、音楽を専門としない学生の中に潜んでいる絶対音感保持者の割合や傾向を見出し、その結果によって、一般学生への音楽を扱う講義のあり方、学生へのアプローチを再検討する手掛かりとなることを期待した。

## II. 研究の方法

### 1) 音感保持テスト実施のための準備

学生の音感保持調査のために、音感セルフチェックテストを作成した。対象者は音楽を専門としない学生であることから専門的な知識が無くても容易に回答しやすいことに重点を置いて作成し、簡単に感じられるように分量を最低限に抑えた。また回答方法は音楽家向けの一般的な聴音試験では楽譜上に実際の音の高さに合わせて音符を示すことが通常であるが、楽譜を読むことも難しい学生もいることを見越し、ラジオボタンであらかじめ選択肢を準備した。音楽に苦手意識がある学生は「わからない」と感じるとテスト時に、苦痛を感じる可能性もあるため、飽きないように視覚的にも親しみやすさを持たせる方法が好ましく、問題音源をベースとした視覚的にも興味を湧くようにカラフルな色遣いのイラストや指示のテロップを入力した動画を作成し、視聴しながらGoogle Formsで入力していく方法を取った。また、絶対音感の保持と固定ドか移動ドどちらの傾向にあるのかを調べる（相対音感の関連も含めて）ために、3つのセクションに分けた。

#### 【セクション1とセクション2】

絶対音感保持の有無を調べるテスト：ピアノ音を使用し、ピアノの音域内で音をランダムに1音ずつ選び、各音、3回ずつ鳴らす。

**絶対音感テスト セクション1 初級編 (図1)：**ピアノの音を用い黒鍵を省いた白鍵の中（乾音）から音をランダムに10音選んでそれぞれ3回ずつ鳴らす。次の問題に移る際には約15秒のインターバルを持たせ、隣り合う音を避け、音域も広めに跳躍する構成音とした。何の音であるか可能性のある音名があらかじめ示された多肢選択式とし、音の高さ（同じドでもオクターブ毎にドは何個もあるが、高さは限定しない）のドレミファソラシ7音と「わからない」という項目の中から選択させる。MuseScoreを用いて楽譜を作成し、データを音源化し、mp3形式で保存した。セクション1のMuseScoreで作成した楽譜のデータを図1に示す。

楽譜の音符以外の書き込み（各問題の正解等）は後か

ら加えた。前後の音程差を記したのは正答率に何らかの影響があるかの手掛かりになる可能性があるので、参考として便宜上書き入れている。また、オクターブ以上広がる音程は超過しているオクターブを差し引き8度以内に読み替えている。

**絶対音感テスト セクション2 中級以上編 (図2)：**ピアノの音の中から派生音も含む（#やbの付く主に黒鍵の音）全部の音の中からランダムに10音選んでそれぞれ3回ずつ鳴らす。セクション1と比べ選択肢が多くなり、ドレミファソラシとそれぞれの黒鍵の音、計12音と「わからない」という項目の中から選択する。難易度もセクション1と比べおのずと上がるが、セクション2の問題は楽譜上では第1問レドであるがド#も異名同音として聴こえ方は全く同じになる。以上を踏まえ、選択肢は異名同音の両方を記すこととした。以下、注意点はセクション1と同様である。

#### 【セクション3】

**固定ド 移動ド 判別テスト：**ベートーヴェンの歓喜の歌のメロディを冒頭の8小節間、第1問：へ長調（F dur）、第2問：ニ長調（D dur）で最初に主和音を鳴らし、そのあとメロディをピアノ音で鳴らす。それぞれ2回ずつ、繰り返す。選択肢は実音で聴こえるか、階名（ドレミ）で聴こえるかの選択肢から聴こえる方、あるいは判別できないという項目から選ぶ。本来ならば楽譜を示し、聴こえるメロディを書き込むという方法がふさわしいが、音楽専門知識がない学生たちを対象にしているため、このような形を取った。

楽譜編集完了後、mp3形式の音源にエクスポートした。

その音源をベースとしてiMovieアプリで動画編集を行った。図4は実際に作成した動画の画面のスクリーンショットである。セクション1は5分31秒、セクション2は5分34秒、セクション3は3分40秒、合計15分弱の動画となった。音楽に苦手意識のある学生でも集中力が持続することを第一に考えたため、絶対音感があるかないかの判別は今回作成した簡易的なテストでは足りない部分もあるが、学生の興味を優先して作成した。

### 2) 講義において

筆者の担当する一般教養科目「くらしと芸術」（教育学部、理工学部、政治経済学部の選択者）の講義において身近に存在する音楽的トピックの一つとして「絶対音感」について扱った。その際、導入として学生と同世代の間で人気を博すアイドルグループ「日向坂46」の「ドレミソラシド」の音源を聴かせ、どう感じるかの意見共有を行った。音感が働く際に起こりうる「違和感」について触れ、その理由を探るため以下の重要な基礎的な音感に関連するキーワードを示した。そのあとに「音感セルフチェックテスト」を実施した。

## 絶対音感テスト セクション1 初級編

♩ = 84

第1問 正解:a/ラ ← 短6度 → 第2問 正解:f<sup>2</sup>/ファ

18 ← 減5度 → 第3問 正解:H/シ ← 短3度 →

37 第4問 正解:d<sup>3</sup>/レ ← 短7度 → 第5問 正解:e<sup>1</sup>/ミ

56 ← 長7度 → 第6問 正解:F/ファ ← 完全5度 → 第7問 正解:c<sup>2</sup>/ド

75 ← 完全5度 → 第8問 正解:g<sup>3</sup>/ソ ← 完全4度 →

94 第9問 正解:D/レ ← 完全4度 → 第10問 正解:A<sub>1</sub>/ラ

図1 セクション1 問題

## 絶対音感テスト セクション2 中級以上編

♩ = 84

← 完全4度\* → **第2問** 正解:  $fs^2$  または  $ges^2$   
 ファ# または ソ♭

**第1問** 正解:  $des^1$  または  $cis^1$  (ド# または レ♭)

← 長7度\* → **第3問** 正解:  $G_1/\text{ソ}$

← 短6度\* → **第4問** 正解:  $es^1$  または  $dis^1$  (ミ♭ または レ#) → **第5問** 正解:  $ais^2$  または  $b^2$   
 ラ# または シ♭

← 長2度\* → **第6問** 正解:  $c/\text{ド}$  ← 短6度\* → **第7問** 正解:  $as^1$  または  $gis^1$   
 ラ♭ または ソ#

← 増4度\* → **第8問** 正解:  $d^3/\text{レ}$

← 増4度\* → **第9問** 正解:  $As_1$  または  $Gis_1/\text{ラ♭}$  または  $\text{ソ}\#$

← 長6度\* → **第10問** 正解:  $f^4/\text{ファ}$

図2 セクション2 問題

## 固定ド 移動ド 判別テスト

固定ド(絶対音感保持)の場合 「ファラドの和音」と聴こえる 移動ド(相対音感保持の傾向)の場合 「ドミソの和音」と聴こえる

♩ = 96

**第1問** 1回目

固定ド(絶対音感保持の場合はこちらに聴こえる) ラ ラシ♭ド ドシ♭ラソファファソラソファファ  
移動ド(相対音感保持の場合はこちらに聴こえる) ミミファソ ソファミレ ドドレミ

14

ラ ソソ ララシ♭ド ドシ♭ラソファファソラソファファ  
ミレレ ミミファソ ソファミレ ドドレミ レドド

26 2回目(1回目と同様に)

固定ド(絶対音感保持)の場合 「レファ#ラの和音」と聴こえる 移動ド(相対音感保持の傾向)の場合 「ドミソの和音」と聴こえる

**第2問** 1回目

固定ド(絶対音感保持の場合はこちらに聴こえる) ♯ラ♯ラソラソラソラ♯ミ  
移動ド(相対音感保持の場合はこちらに聴こえる) ミミファソ ソファミレ

49

レレミ♯ラ ♯ラ♯ラソラソラ♯ミレレミ♯ラ ミレレ  
ドドレミ ミレレ ミミファソ ソファミレ ドドレミ レドド

60 2回目(1回目と同様に)

71

図3 セクション3 問題



図4 作成した動画のスクリーンショット

日向坂46 秋元康 作詞、野村陽一郎 作曲 Sony Recordsより発売  
『ドレミソラシド』 メロディ冒頭の4小節 音感があることによって生じる違和感

①ド レ ミ ドレ ミ ドレ ミ レ ミ ド レ ミ ド レ ミ  
②ミ ♭ファ ソ ミ ♭ファ ソ ミ ♭ファ ソ ファ ソ ミ ♭ファ ソ ミ ♭ファ ソ

①は実際の楽曲の歌詞  
②は絶対音感がある人なら実音の階名で聴こえることが多い~その場合の楽曲を聴いた場合に聴こえる音名

3  
ド レ ミ ドレ ミ ドレ ミ ソ ラ シ ド  
ミ ♭ファ ソ ミ ♭ファ ソ ファ ソ ソ ソ ソ ファ

4小節目:絶対音感、相対音感保持の人どちらも大きく違和感を感じる箇所

図5 楽曲「ドレミソラシド」の冒頭8小節のメロディ

【視聴した楽曲において違和感を感じるかどうかについて】

楽曲「ドレミソラシド」の中で、絶対音感と相対音感(移動ド的な捉え方)から歌詞の音と実際の音が異なる違和感があると思われる点を図5に示している。楽曲「ドレミソラシド」のメロディの歌いだし4小節を楽譜上に表したものである。ホ長調、Es音を主音とする長音階である。歌詞を①(1段目)に示した。実音ではE♭から始まるのに対して音階で絶対音感保持者なら「ミ(の♭)」と聞こえるところを「ド」の音名で歌詞として乗せている。順番に実音なら「ミ♭ファソミ♭ファソ」と聞こえるフレーズに「ドレミドレミ」とあてられている。絶対音感保持者であれば1曲通して音が異なるため気持ち悪く感じられる可能性の高い歌詞の乗せ方が終始繰り返される。2段目に絶対音感保持者(筆者もそうであるが)がどのように聞こえるかを音名で表している。

では移動ドについて考えると、ホ長調で第1音がEsをドと階名唱することに抵抗ない相対音感的な感覚を持ち合わせている学生にとって、メロディの歌いだし3小節目までは違和感なく続くことが考えられる。4小節目では歌詞では「ソラシド」という上行形で乗せているのに、音型(実音階名ではファシ♭ソファ)については意味をとらえられない。

この場合、絶対音感保持者の固定ドの考え方では②で示しているように「ファシ♭ソファ」と聞こえるはずである。移動ドの場合というと「レソミレ」と聞こえるはずの音型で、4小節目の歌詞は音感保持者にとっては理

解に苦しむ音列で示されており、不思議な感覚に陥ることは否めない。

音楽に精通しているスペシャリストたちが制作者として携わっている楽曲であり音楽にそのような違和感を持たせることを意図して作っているとも推測される。話題作り、一部の人の間で炎上に近い状況を半分期待してのことなのか、宣伝効果を狙ってのことではないのか、等と勘ぐってしまう。歌詞の中では「ファがない」と出てくるので学生はそちらの方に興味が傾いていることも分かったが、実は絶対音ではファは出てくるので、音楽的な観点からは理解に苦しむ点の多い作品である。

【キーワードと先行研究について】

A. 絶対音感と相対音感

「絶対音感：音楽界で最も権威があるとされる『ニューグローブ音楽辞典』には次のように記されている『ランダムに提示された音の名前、つまり音名がいえる能力。あるいは音名を提示されたときにその高さで正確に歌える、楽器を奏でることができる能力である』『天性のものか、後天的なものかはまだわかっていない』『モーツァルトは絶対音感があった。彼の耳が人一倍よかったと語り伝えられているのは、友だちの弾くバイオリンが八分の一音低いことを言い当てて周囲の者を驚かせた』(5)

英語では<absolute pitch>,あるいは<perfect pitch>という。

相対音感：音楽における音(楽音、または純音)との相対的な音程によって音の高さを識別する能力のことで

ある。ある音が鳴らされ、次の音程の隔たりを識別できることにより絶対音感の能力よりも音楽的な構成を見極める力との一つとみなされる。相対音感の後天的にもトレーニングにより身に着けることが可能とされている。

#### B. 固定ドと移動ドについて

**固定ド：**音名読みとも言われる。どの調で演奏されても音名で歌ったり識別したりする方法。曲のキーが変わっても「ド」は「ド」のまま固定される。

**移動ド：**曲のキーが変わると「ドレミファソラシド」が基準音（主音）を起点とし、移動する。**階名読み**とも言われる。

#### C. 先行研究について

新潟大学の宮崎謙一教授の研究「絶対音保有者の音楽的音高認知過程（課題番号: 09610073）平成9年度～平成10年度科学研究費補助金（基盤研究C）研究成果報告書」に、ピアノの88鍵からアトランダムに出題して音高名判断の正答率90%以上を基準に絶対音感保持者の割合を算出、日本の音大生（京都市立芸術大学36人、新潟大学教育学部の音楽教員養成過程の学生37人のデータ）で約30%、ポーランドの音大生27人中で11%が該当することが紹介されている。また、50%以上の正答率の割合で見ると京都市立芸大では70%、新潟大学でも50%近くにのぼる（ポーランドの音大生では30%程度）。

音大生のデータを上記に記したが日本の一般大学でも3%が絶対音感保持者であると言われている。この研究での音高名判断テストは簡易的であり、サンプル数も少ないので、ごくおおまかな目安にすぎないが、だいたいの傾向は見い出せるであろうとの位置づけで行われたものである（6）

今回の研究でも同様に簡易的テストではあるが90%以上正答できたものを確かな絶対音感保持者とし、50%以上の正答者の割合も基礎的な音感保持者として算出することとする。

### Ⅲ. テスト概要

- 1) 対象：授業「くらしと芸術」受講者
  - 2) 時期・回数：
    - 2021年6月8日（教育学部・理工学部）
    - 2021年7月27日（政治経済学部）
 回答は一人一回のみとした。
  - 3) 対象数：教育学部 103名  
理工学部 30名  
政治経済学部 48名
- 計181名のデータを元に結果を考察、分析する。

### Ⅳ. 結果と考察

#### 1) セクション1とセクション2の結果と考察

セクション1、セクション2、10問ずつ、計20点満点のスコアが入力完了送信後に学生たちにGoogleFormより自動的に通知された。平均値は以下（表1）のようになった。

表1 スコアの平均値（20点満点）

所属学部	人数	スコアの平均（ポイント）
教育学部	103	4.82±0.00
理工学部	30	5.83±0.00
政治経済学部	48	4.92±0.00
合計（合算）	181	5.01±0.00

20点満点の平均が約5ポイント、3学部の間では理工学部が一番良いスコアであった。音楽の授業を受講している教育学部の学生が最もスコアが低いという結果であった。音楽を専攻しない学生でもわずかであってもある程度の音感を持つ学生がいるということを示している。得点分布は図6のようになった。正解が5問以下に集中している。音大生のデータと比較して、多くの学生がはっきりとした絶対音感がないということになる。

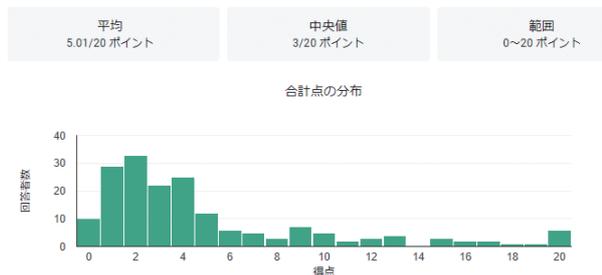


図6 合計点の分布を表したグラフ

**絶対音感有無の判定** 今回のミニテストではセクション1の乾音のみの問題でほぼ満点であれば絶対音感はある程度保持していると言えるかと仮定する。20点満点のうち10ポイント以上（50%以上）正解した学生の人数は次（表2）のようになる。

181人の内、29人、約16%の学生が初級以上、少なからずある程度の音感を持っていることがわかる。（先行研究においての簡易テストでは日本の音大生は約60%。）

表2 10ポイント以上正答した人数の分布

ポイント	人数
10	5
11	2
12	3
13	4
(70%以上) 14	0
15	3
(80%以上) 16	2
17	2
(90%以上) 18	1
19	1
(満点) 20	6
合計人数	29

セクション2は派生音も出題範囲に加わり、かなり難易度が上がる。20問のうちの90%、18問以上の音を言い当てられるとすればかなりしっかりとした絶対音感を持っていると言ってもよい。18ポイント以上獲得した学生は分析の結果をみると8名である。割合でいうと、約4.4%の学生がしっかりとした絶対音感を持っているとみなすことができる。(日本の音大生は約30%、一般大学生は約3%)

先行研究(一般大学)の数値よりわずかに今回の調査での絶対音感保持者の割合が高かった。やはり音大生と比較すると低い結果となった。

セクション1、2の各音の回答状況を図7、図8に示す。図7と図8のそれぞれの回答状況、正解数、グラフの傾向等を考察する。

【図7 セクション1：解答状況、正答、誤答の状況、前後の音程間に着目しての考察】

以下、グラフを見て考えられることを上げていく。

- ・第1問 回答は正解の「ラ」19.3%に対して、「ド」と解答した者が26.5%と上回った。理由として考えられるのは相対音感保持者が最初に鳴った音を基準音ととらえるため、第1音を「ド」と聴こえた学生がいたと推察される。

- ・回答の中で、1番正解率が高かったのは第9問45%であったが、前後の音程間をみると完全4度(ソーレ)、この音程は判別しやすかったのかもしれない。ただ他に完全4度の音程間の箇所はあるのでそれが原因だとは判断できない。

- ・2番目に正解率が高かったのは第5問37.6%、こちらは(レーミ)とオクターブは離れているが隣り合う音程であるため判別しやすかった可能性が高い。

- ・1番正解率が低かったのは第1問19.3%であった。これは前述したように相対音感保持者の影響だと考える。それに続いては第3問目の19.9%、前の音からの音程間

は減5度音程(不協和音程)で聴き分けが難しかったと考えられる(ファーシ)。この2問はセクション1の中で正解数より誤答の方が多かった特徴的な問題である。

- ・音が極端に高かったり低かったりの理由で正解率は変わるのだろうか—五線外の音、第4、8、10問については27.1%、34.3%、29.3%になっており、前の音との関連付けも左右されるが音の高低によって解答率が著しく下がることもなかった。あまり関連はなさそうである。

【図8 セクション2：解答状況、正答、誤答の状況、前後の音程間に着目しての考察】

- ・セクション1からの比較：派生音も出題範囲に加わり難易度が上がったので当然、正解率が下がった。解答の数で比較するとセクション1は541、セクション2は366、セクション2ではセクション1の約68%の正解率となった。

- ・正解率が高かったものは第6問(30.9%)、第1問(28.7%)。第1問に関しては相対音感保持者もドのシャープはそのように聴こえるはずなので、絶対音感保持者との合算になり多くなったのではないかと予想される。第6問目に関しては理由は前の音から考えると隣り合う音程(長2度)なので判別しやすかったのも一つの理由と考えられる。

- ・正答率が低かったのは第9問(12.7%)。これは他のものにくらべて割と悪く見えるのだが、誤答として半音違いの音と迷った形跡が見られるので納得できる。正解は「ソ#またはラト」、誤答として「ラ」と答えたものが多かった。これはド、またはド#またはレトで迷った形跡もあるので第9問は10問の中でも回答が割れ、特徴的であった。前の音からの音程間も「増4度」不協和音程であり、派生音ということも混乱が生じた要因かもしれない。

- ・第9問から続く第10問も解答率が下がったのは(13.8%)、第9問で認識した音がバラバラだったためにその次の音も回答が割れたのだと考えられる。

- ・半音で迷ったのであろう傾向は確認できる。

- ・誤答が回答の分布の中で正答より多かった問題は第3問、第9問、第10問であった。セクション1にくらべて派生音が入ることにより、判別ができなくなっていると推察できる。ただ、この中の第3問、第10問は派生音ではなく、乾音で、派生音だからわかりにくいということではないようである。

【セクション1とセクション2を総合しての考察】

- ・正解率が低くなる要因として前後の音程間が不協和音程のケースでその傾向がみられた。

- ・派生音がそうでないかは正解率にはあまり関係しない。

- ・セクション1では隣り合う音で迷う傾向はあまりみられないが、セクション2ではその傾向が強かった。

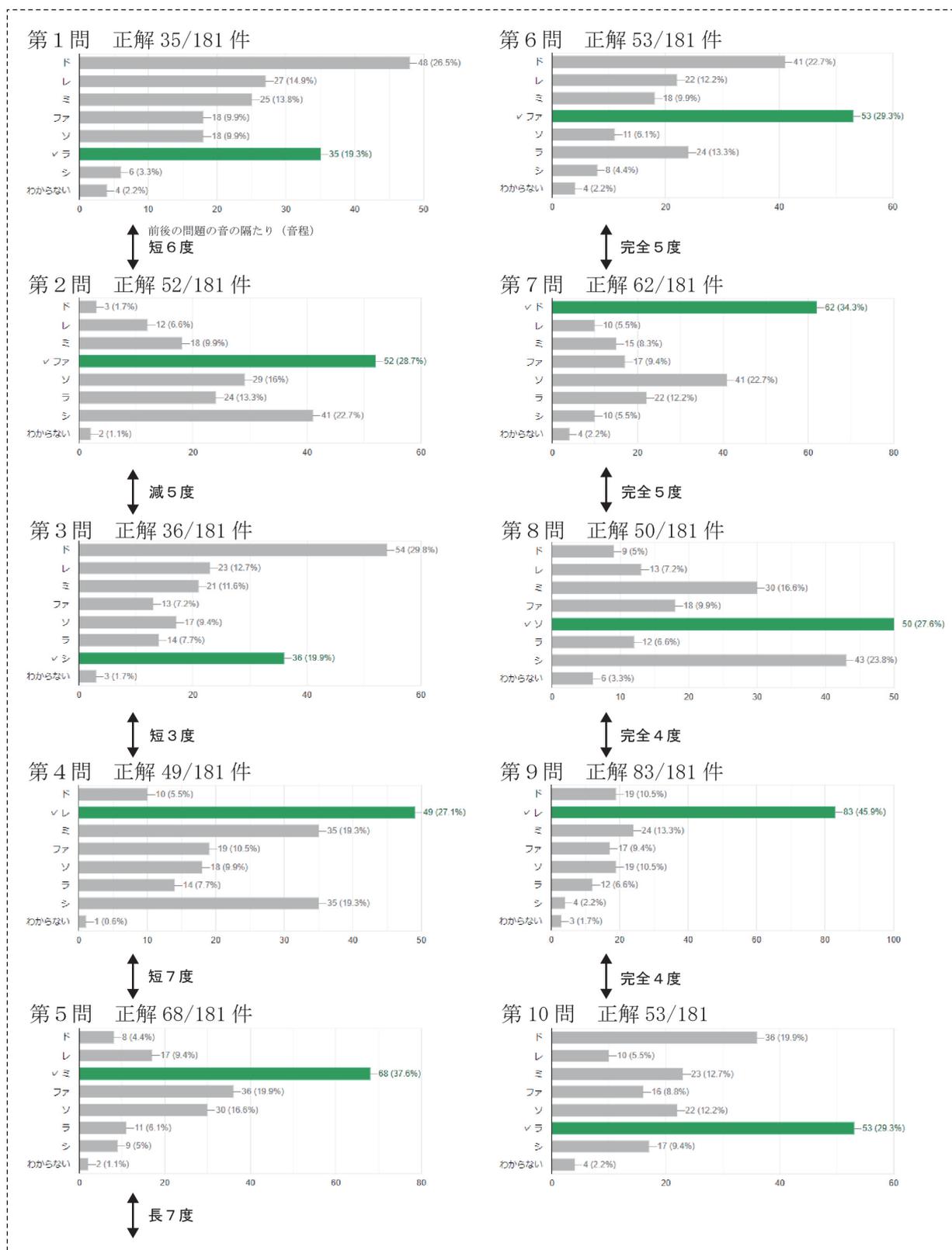


図7 セクション1の回答状況を表すグラフ

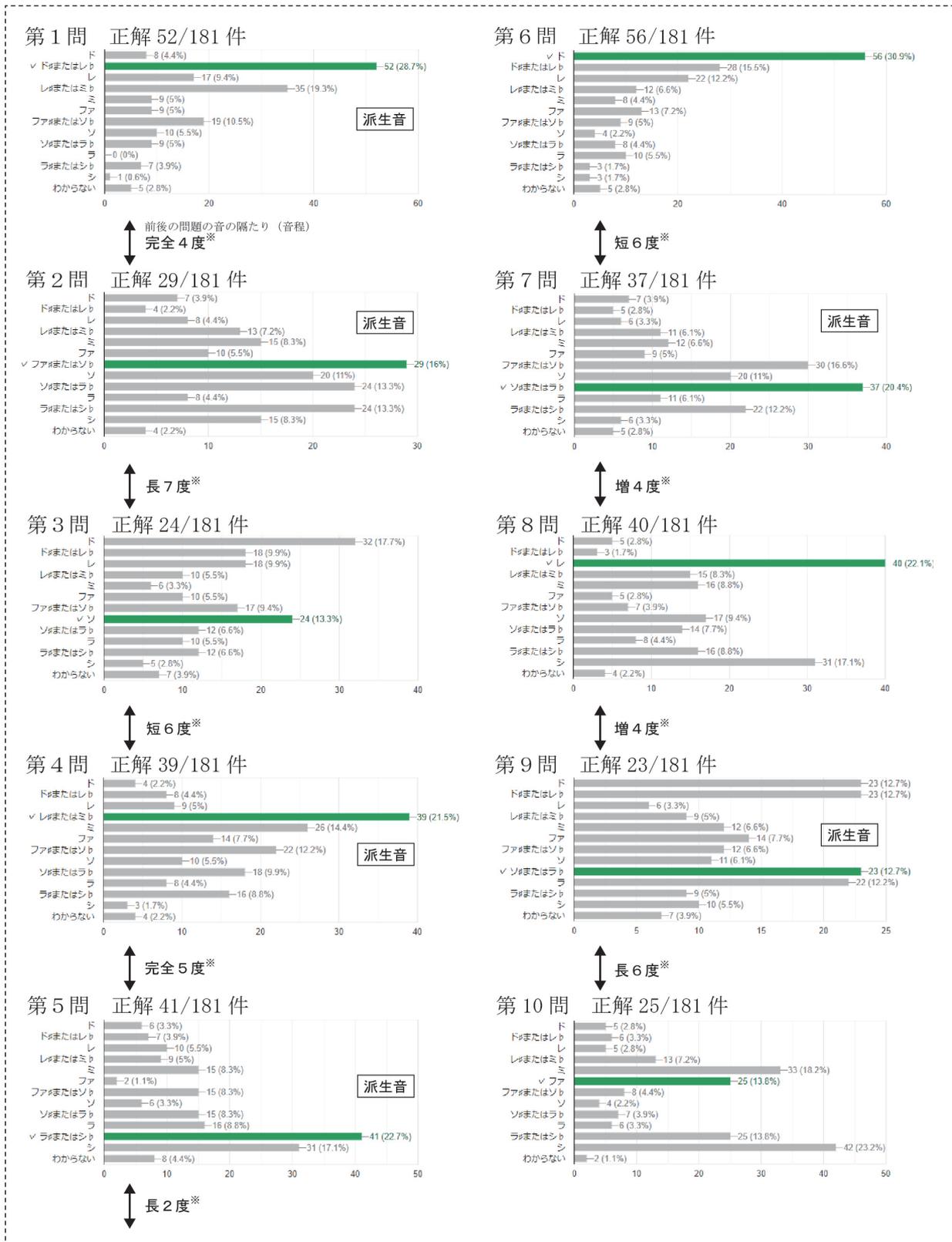


図8 セクション2の回答状況を表すグラフ  
(音程間の※は他の読み替えも出来る場合に記している)

## 2) セクション3の結果と考察

第1問：図9，第2問：図10のような結果となった。

第1問の回答 (181名)

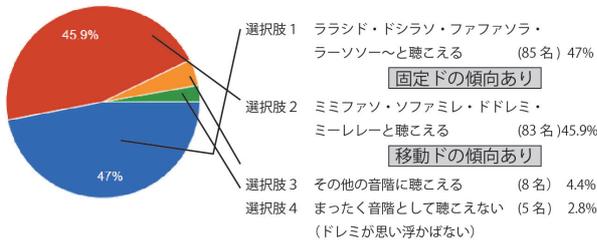


図9 セクション3 問題①の結果を表すグラフ

第2問の回答 (181名)

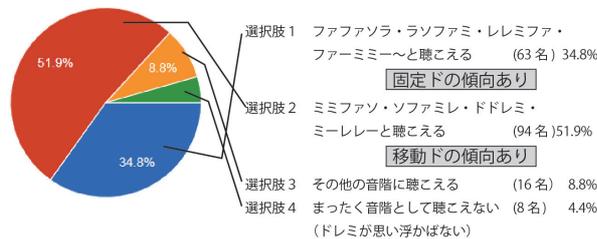


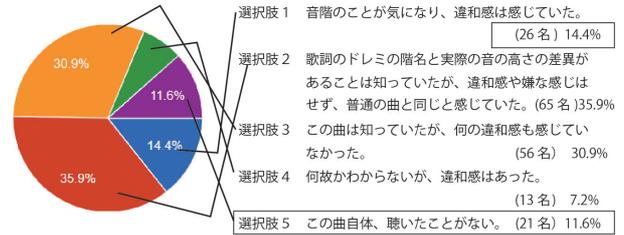
図10 セクション3 問題②の結果を表すグラフ

学生に取り組んでもらったGoogle Formsの問題のセクション3の最後には学生に向けて以下のように判定方法のヒントを記した。セクション3の答えから導き出されるもの/選択肢1を選んだ人：固定ド， 選択肢2を選んだ人：移動ド， 選択肢3を選んだ人：何らかの音階を感じ取る間隔は所持しています。 選択肢4を選んだ人：音階を感じ取る能力は現時点では所持していないようですが、トレーニングにより身に着けることは可能です。

固定ドの傾向がみられるのは問題①では47%，問題②では34.8%であった。多少ばらつきはあるものの、半数近くの学生が固定ドの傾向がある可能性がみられた。それに対して移動ドの傾向がみられるのは問題①において45.9%，問題②においては51.9%。多少、移動ドの傾向が強く出ているがざっくりと捉えると半々に近い形で固定ド，移動ドとメロディをとらえる学生がいると考えることができる。それとともに「まったく音階として聴こえない」という学生も2.8~4.4%いるということがわかった。

【追記】ミニテストのフォームでは「日向坂46の『ドレミソラシド』についてお尋ねします。この曲を聴いて、違和感を感じていましたか？」という問いにも答えてもらった。回答者181人の中で26名が違和感を感じて（選択肢1）いたと回答した。選択肢5のこの曲を知らなかった学生は省くこととし、差し引いて再計算すると、もともと違和感を感じていた学生は26/160→16.25%であった。

日向坂46の『ドレミソラシド』についてお尋ねします。 回答数:181人  
この曲を聴いて、違和感を感じていましたか？



違和感を感じていた人

選択肢5の21人を181人から差し引き、160人中の選択肢1の21名の割合を再計算すると→ 26/160 ~ 16.25%

図11 『違和感を感じていましたか?』回答のグラフ

前述したⅢ.音感ミニテストの結果と考察1) セクション1とセクション2の結果と考察の中で記したが、20問中10ポイント以上正解した学生をカウントし、181人の内、29人の学生が初級以上、少なからずある程度の音感を持っていると仮定したがその割合は約16%であった。偶然にもこの追記の問題の「違和感を感じた」学生の割合とほぼ一致した。「違和感を感じたもの」が絶対音感が少なくともあるものと仮定できるとすると、今回作成した音感セルフチェックテストはある程度、辻褃が合う結果となったと言えそうである。

## IV. 今後の課題、まとめ

チェックテストの問題として扱う音、羅列は筆者の感覚的な判断で決定したものである。前後の音の音程間については意図してこの順番にはなっていない。絶対音感の保持の有無を確認するテストとして改善すべき点があるのは明確だ。音程間や相対音感保持者の存在を考慮した問題作りを次回は考慮しなければならない。また今回は15分という短い時間で完結できるものを目指したが、違う音列で数回分テストを作成し、複数回受けてもらえば傾向をより見出しやすくなる。あるいは問題数を増やしていろいろな音列パターンで作成するという方法もある。また、今回は絶対音感保持について、ある程度見極められるが、相対音感保持調査に関して言えば内容はかなり不十分である。相対音感の保持についてはそれに特化したテスト内容の検討が必要だ。今回のテスト作成の課題と合わせて更に発展させていきたい。

今回の研究は、今後の授業での学生への対応として、ある一定の割合で音の高さを言い当てられる学生がいること、それと反対にほとんど音感を持たない学生がいることも踏まえ、講義を検討し直す十分な資料となりうる。幅広い学生層に配慮は必要であるが、一般教養科目としてより専門的な内容を一部盛り込めることも期待できる。最後に「絶対音感」の有無はその人の音楽的才能を保証するものではなく、単なる特徴、目安の一つとら

えるべきことを学生には伝えていく必要がある。優れた音楽家には不可欠の能力と思われがちな絶対音感であるが、必ずしも音楽表現のプラスになるとはいえないということをよく耳にする。国によっても絶対音感、相対音感の保持の割合はそれぞれで施されている音楽教育が違うのが恐らく原因で、日本は他国に対して絶対音感保持率は高いとの研究結果もある。音楽表現の上では相対音感の方が絶対音感よりも重宝がられることが多い。日本の教育方法は正しいといえるのか、その是非も含め、様々な面から音感教育について更なる研究が必要である。

### 引用文献

- (1) <https://twitter.com/koltuko5/status/1137202587357155329> (参照2021年11月11日)
- (2) <https://twitter.com/KAZUNnK/status/1259177896586797058> (参照2021年11月11日)
- (3) <https://twitter.com/kanato4afat/status/1160422922177015808> (参照2021年11月11日)
- (4) [https://twitter.com/Wada\\_Yoshitake/status/1331609347005190144](https://twitter.com/Wada_Yoshitake/status/1331609347005190144) (参照2021年11月11日)
- (5) 絶対音感 最相葉月 著1993年4月発行 pp.19～pp.20.株式会社小学館 1998年3月10日発行
- (6) [http://www.human.niigatau.ac.jp/~psy/miyazaki/Papers/Report1999/Report%20\(WP\).pdf](http://www.human.niigatau.ac.jp/~psy/miyazaki/Papers/Report1999/Report%20(WP).pdf)  
絶対音保有者の音楽的音高認知過程 (課題番号: 09610073) 平成9年度～平成10年度科学研究費補助金(基盤研究C)研究成果報告書 平成11年3月(1999年3月)研究代表者 宮崎謙一(新潟大学人文学部教授) (参照:2021年11月11日)

### 参考文献

- (1) 響きの科学 名曲の秘密から絶対音感まで ジョン・パウエル 著/小野木明恵 訳 早川書房 2016年8月15日発行
- (2) 絶対音感神話: 科学で解き明かすほんとうの姿 宮崎謙一 著 化学同人 2014年7月10日発行
- (3) 【日本の音楽学生は絶対音感が優れている - 新潟大学】 [https://www.niigata-u.ac.jp/wp-content/uploads/2018/11/301112re\\_topi.pdf](https://www.niigata-u.ac.jp/wp-content/uploads/2018/11/301112re_topi.pdf) (参照2021年11月9日)